看護とはなにかを再考する

看護とは、書いて字のごとく「患者を看て、病から護ること」と考えていた。ところが、看護師を志し、実際に学びはじめてから、果たしてそれが本当に実行できるのか不安になってきている。

看護を学びはじめて多く目にしたのは、「基準値」「平均値」「一般的」「普通」と言った言葉であった。そして当然のことながら、「基準値」内であること、「平均値」域にあること、「一般的」であること、「普通」であることを「良し」とし、それらから外れれば「問題」「異常」と判断する。学習を積み重ねるうちに、いつのまにか私の頭は「基準値を看て、基準値通りであることを護る」ことを看護であると考えはじめてしまっているようで恐ろしい。

本来、人には個人差があり、生活面においても個々のリズムがある。たとえば、夜の方が頭が冴えるという人もいれば、朝食を食べない方が調子が良いという人もいるだろう。ナイチンゲール誓詞の中の一節にも「わが手に託されたる人々の幸のために身を捧げん」とあるように、看護の基本は、個々人の心身のありようや生活のリズムに合わせた最良の方法を見出し、たとえそれが「普通」から逸脱する状況であったとしても、その人自身が幸せであるように、言い換えれば、生きやすいようにサポートすることではなかったろうか。

思い出すのは、13 年前にがんで他界した父のことである。終末期になって、父は「病院には自由がないから嫌だ」と言い張り、看護師である母の説得を振り切って無理矢理退院し、最期の日々を家で過ごした。寝たいときに寝て、起きたいときに起き、食べたいときに食べたいものを食べたいだけ食べ、最後の日までベッドの上で好物の焼酎を嗜んでいたのを記憶している。私は幼いながらにも、そんな父の姿を見て安堵していたように思う。入院していたら、ああはできなかったろう。一般の外科病床で毎晩焼酎を飲むなどということは、決して「普通」ではないからだ。しかし、それを許されたことが、まさに父の生き方を尊重した看護だったのだと思う。

あの時の父の笑顔を覚えているにもかかわらず、今、看護の道を歩き始めた私は、早くも「基準値」「平均値」「一般的」「普通」といった言葉に縛られはじめている。もちろん、それらを蔑ろにして否定するわけではない。しっかり把握しておくべきことであるし、看護を科学的に実践するうえで重要な事項だ。しかし、同時に、その人自身が大切にし、基準とするものを、一緒に大切にできる気持ちを持ち続けたいと思っている。「人を看て、その人の生き方を護る」。これこそが私のやりたい看護なのだと思う。